⑧「90年・1995」記念誌―経済学部創立90周年記念事業会編を読む

これは平成7(一九九五)年10月に母校創立90周年記念事業会が作成した記念式典向けの小冊子である。内容は4部構成。第1部は「大学院経済研究科設置記念式典」の学長・来賓の式辞と学科長挨拶。第2部は「創立90年の歩み」。第3部は「歴代瓊林会長」の肖像写真と業績。第4部は記念募金協賛75社への謝礼と広告。A4判で本文23頁・広告45頁。私が読むのは第2部「創立90年の歩み」。此処は年表形式で左辺に母校の事歴、右辺に関連する社会と友誼校の出来事を並べて表示する。第1章は「創立から70周年(明治38年～昭和49年)」。第2章は「最近の20年・昭和50(一九七五)から平成7年(一九九五)年の歩み。この冒頭に「この20年間は永田会長の時代であった。創立70周年記念式典をはじめ、5年に4回の記念行事を指揮…数回の記念募金の大半は「『母校に大学院を』の目的のもとに集中的に運営された。90周年という節目に遂に悲願を達成、レリーフを贈呈し感謝の意を表す」と記される。

注目すべきは、本表が「母校70年史」以降、20年の歳月を隔てて初めて公にされた母校同窓会の歴史的な記録であるということだ。さて昭和50年までには新制の母校が直面した―単科大学昇格・商業短大設置・貿易学科新設・経営学科改組などの諸問題が解決し、施設面でも文教地区への校舎移転問題も収束、昭和46年には新校舎も竣工した故、当面の課題は大学院設置問題に絞られていた。但しこの時期までに和歌山・小樽・横浜・彦根・山口など旧高商系各校は全て大学院設置を完了していた。その中で独り母校のみが、何故に其の後20年にもわたり、置き去りにされてしまったのか。

年表はこの経緯を次のように記す。①昭和52年、瓊林会総会で竹田相談役から「大学院開設」の緊急動議あり満場一致賛成。②昭和61年-長崎大学移転統合問題。保田学長私案「名門経済学部は旧商校の中で唯一の大学院をもたぬことは…理由は簡単、教授不足」と指摘。③昭和63年-経済学部教授3名助教授3名の大量転出。④平成元年-長崎大学評議会「移転統合断念」を決定。⑤平成3年-経済学部を考える三者懇談会発足。「平成4年度概算要求が、全てカットされるという事態となり、政治家による教育への不当介入だとする記者会見や、長崎大学はもっとしっかりしろとの高官発言が地方新聞に報道され、市民の反応も様々であったが、瓊林会としては世論に振りまわされることなく教官・学生・瓊林会による三者懇談会を設置した」⑥平成5年-大学院設置議決、人事基本委員会設置。⑦平成6年-教授8名・助教授3名など計12名の増員。⑧平成7年-学院設置記念式典…。将に艱難辛苦の途だった。

こうした年表記述の背景に何があったのか。本誌は母校創立90周年式典向けの関係者讃仰・募金謝礼誌であるから、裏面の事情は一切語らない。それから又20年が経過した今日、母校と大学本部・地元政財界・官庁との確執は如何に推移してきたのであろうか。この意味で本誌は記憶に留めるべき資料である。

☆本書の周辺☆　一見何でもない記念事業謝礼誌だが、年表を細かく見ると、当時の苦悩・苦労が密かに語られており、編纂者の知恵が偲ばれる。表紙を見る丈では、何の本か分らないのも御愛嬌。